



尼崎市立小園中学校 第2学年

社会科通信

なんでやねん

発行責任者 倉橋 忠



No. 6 - 1 / 3

平安時代の貴族生活について考える

ちょっとクサイ話。

貴族の生活（生活の歴史:よもやま話編）

授業中にも話題にしましたが、ほんの少し教科書から離れて、食べ物とトイレをネタに、貴族の生活を紹介しておきましょう。

平安時代は、400年間もある非常に長い時代です。そのために、同じ平安時代と言っても、前期と中期、終期では社会のようすも、貴族の生活にも大きな違いがあります。しかし、中学校でその細部にわたる学習は必要ないでしょう。そこで、藤原氏の摂関政治が栄えた中期（藤原良房～道長・頼通のころ）を時代の象徴的な場面として考えていきます。

平安時代の貴族の華やかな生活とは反して、貴族の食生活は、いたって不健康で不自然なものでした。貴族は仏教と陰陽道を信じ、肉食を拒否したため、病弱な体だったと考えられています¹⁾。わけても、室内での動きだけで、運動不足になりがちであったため、女性の体位は著しく低下していました。さらに、早婚、多産による母体の弱体化によって、乳幼児の死亡率を増大させました。それらが、当時の貴族女性の平均死亡年齢を極端に低くさせた原因でした。ちなみに、記録で明らかな分だけでみた場合、貴族の平均寿命は、男性60歳余、女性52歳余です。女性の寿命が短いのは、お産が関係しています。藤原道長は、62歳で死んでいます。なお、道長の子どもたちには、80歳をこえている者が多くみられます²⁾。

しかし、庶民の平均寿命は、縄文時代よりも低かった（早く死んだ）か、それと同じくらいと考えられています（35～45歳）。それは、縄文時代では自然的条件が主な死因でしたが、平安時代では年貢や労役によって庶民は疲れ、縄文時代よりも、暮らすための社会的条件が悪かったと考えられるからです¹⁾。

さて、母屋を中央にして左右対称に造られた家を持ち、敷地内には庭と川・橋までこしらえた池が掘られていた寝殿造が、貴族の生活舞台でした。その寝殿造には、今日のようなトイレはなかったのです²⁾。貴族たちは樋殿とよばれる畳を敷いた部屋で、衝立で仕切った所に置かれた樋笥という箱（おまる）に、用を足したのです³⁾。高貴な女性は、十二単の中に樋笥を入れて、外から見えないように用を足した⁴⁾⁵⁾ようです。もっとも、庶民は野糞だったと考えられてますけど。

なお、室町時代には、寝殿造を母胎にして、書院造が造られるようになり武士の建物となりました。その書院造には、「トイレ」がありました。

ところで、平城京の跡からは、「水洗トイレ」の遺跡と考えられるものが発見されていて⁶⁾、他の奈良時代以降の貴族の屋敷跡などからも「水洗トイレ」や、「ため込み式トイレ」の跡と見られるものが多く発見されています。「水洗トイレ」や「ため込み式トイレ」が、貴族の屋敷には相当早く造られていたと考えられるのに、なぜか寝殿造には「水洗トイレ」がないのです。なぜ、寝殿造に「トイレ」がないのか。この部分について、研究者の間では議論になっているところなので、興味がある人は研究してもおもしろいと思います。

中間考査で表現された 平安貴族への君たちの「態度」

今回の中間考査では、「平安時代の貴族のくらしについて、君はどう考えるか。自分の考えを説明しなさい」（問題7）として、平安貴族に対する君たちの意見を聞きました。次に紹介するように、貴族の生活に対して、好意的にとらえている人もいれば、批判する人もいます。それが、「個性」なのでしょう。

友だちの「作品」から、様々な意見があることを知るのもおもしろいと思います。

¹⁾ 前掲、高木和男『食からみた日本史』上巻pp. 122-123

²⁾ 楠本正康『こやしと便所の生活史』ドメス出版 1981 p. 37

³⁾ 荒俣宏「厠、便所、トイレの起源とは」『日本トイレ博物誌』図書出版社 1990 p. 15

⁴⁾ 前掲。荒俣宏「厠、便所、トイレの起源とは」p. 10

⁵⁾ 芥川龍之介の『好色』は、貴族の女性に恋する男が、恋する女性の樋笥を盗もうとする話を題材にした短編小説である。興味のある人は、一度読んでみたら？

⁶⁾ スチュアート・ヘンリ著『はばかりながら「トイレと文化」考』文春文庫1993 pp. 136-141が、おもしろく、わかりやすい。

¹⁾ 樋口清之『新版 日本食物史』柴田書店 1987 pp. 134-135

渡辺実『日本食生活史』吉川弘文館 1964 p. 110

ただし、高木和男は、貴族は乳製品を多くとった食生活の時代が考えられ、その時代では栄養不足ではなかったのでないか、と疑問を提出している。後掲、高木和男『食からみた日本史』上巻p. 119

²⁾ 高木和男『食からみた日本史』上巻 芽ばえ社 1986 p. 122



尼崎市立小園中学校 第2学年

社会科通信

なんでやねん

発行責任者 倉橋 忠



No. 6 - 2 / 3

採点基準

は、次の通りです。

◎ 結論や感想については、採点対象としない。

◎ 論理矛盾^{むじゅん}は、減点2点とする。

◎ 以下の論点につき、具体的にふれていること。

① 平安時代の貴族の生活の具体的な姿を指摘している。

たとえば、寝殿造に暮らし、和歌や様々な行事を楽しんでいたり、迷信や因習にとらわれた生活をしていたことなど。（2点）

② 貴族の生活に「ひま」があり（生産労働をしないため）、そのありあまるような時間の中で、女流文学に代表される国風文化が生み出されるようになったことなどを指摘していること。（2点）

③ ごくわずかの貴族の豊かな生活を支えていたのは、農民の労働であり、農民の生活はひさんなものであったことの指摘があること。（2点）

④ 今日の生活との関連で、平安時代の文化をとらえている。（1点）

たとえば、「かな」が日本の文化を大きく成長させ、われわれは、その文化があって、豊かな生活を築くことができていることなど。

以上の点に、具体的にふれたうえで、自分の考えが示されていることが、重要です。単なる感想文では採点対象となりません。

友だちの「作品」から学ぼう

次に紹介するのは、7点満点中4人以上の人（一部の人）の「答案」です。いつもどおり、「答案」に修正は加えていません。そのために、少し誤^{きじゅつ}った記述が入っている場合がありますから、注意してください。

3組 S. A. 平安時代には、国風文化が栄えて、いろいろな書物などがあったり、寝殿造という立派な所に住んだりして、すごくぜいたくだったと思う。又、たくさんの荘園をもち、農民からも、税をとり、今で言う、「お金もち」だったと思う。
でも、もし私が この時代の貴族だったら農民みたいに汗をかいて 田をたがやす方がいいと思う。その方が、よっぽど幸せだと思う。

3組 M. I. 平安時代の貴族の人は、すごげいたくでお金持ちの人がいっぱいいたと思う。中でも藤原氏とかは、自分の娘を天皇、次期天皇の妃にして、それで自分が天皇家の親せきになろうとか考えて影で天皇とかを あやつっていると思う。藤原氏とかは、悪ぢえとかがはたらくけど それだけかしこいってことかもしれない。平安時代の人は武士をどうぐにしかあつかってなかったから 鎌倉時代には、立場が逆転して、どう思ったのか？ たぶん くやしかったと思うなあ。仏教に力をいれていて、けっこう人の言ったことを真に受けるタイプの人が多かったんかな。と思う

3組 T. K. 平安時代の貴族たちは荘園から多くの収入がはいるので とてもぜいたくなくらしをしていた。でも、農民は、国司が自分たちの財産を増やしたいために不正な税をとられ、とても苦しい生活だったと思う。
貴族がゆうふくにくらしていたのは、荘園で農民がはたらいてくれているからなのに、その収入で寝殿造を造ったり、大和絵のびょうぶを屋しきにおいたり、その上、庭には池などをつくり、舟をうかばせ、とても華やかに生活していた。 貴族がこんなにぜいたくをしている分、農民は とてもつらい思いをしていた。
貴族は荘園の収入をたよるようになり（作文は途中で終わっています … 倉橋）

3組 K. S. 平安時代は、貴族、民衆とも生活はすごくひどくなかったと思う。また、この頃貴族は政権をにぎっていて、毎日がぜいたくざんまいだったと思う。私には想像もつかないくらい富をたくわえていたと思う。しかし、貴族が毎日なにもこまらずに、生活しているのは、一方で民衆が毎日のはたらいて、農作物を作ったりしているから、貴族はなにもせず生活がなり立っていると思う。私もまた今貴族と同じ立場にいるように思います。自分で農作物をつくらず、毎日あれが嫌いこれが嫌いとかいって残したりしました。でもろくに農作物を作ったこともない私が、残したりする権利はないと思いました。今の生活も農民の人たちが農作物をつくって、今の生活が成り立っていることを頭に入れて、ふだん生活をしたいです。またそのことを、他の人にもわかってもらいたいと思います。

3組 K. N. 平安時代の貴族は、ずるいことばかりやっていると思う。平安時代の貴族というと、いつも平和で、いつもあそんでくらしているっていうイメージがあって、今まで勉強してきたことが信じられないと思った。
今は鳥の肉や、いろんなものを食べているけど貴族は、仏教をやっていたために 生きもの（鳥や牛など）を殺すことも 食べることもできない生活だった。それとは反対に、町や村の人々は、仏教なんかしらないから、いろんなものを食べて生きているから、貴族よりも じょうぶでけんこうだったんじゃないかと思う。 貴族というと、いろんなものがあるって、いろんなものを食べて ごうかな食事かと思ったけど、民衆の方がごうかだったことにびっくりした。（民衆の方が豪華な食事をしていただけではありません。栄養的にバランスがとれていたということです。 … 倉橋）

3組 M. Y. 平安時代の貴族は、優美な屋根をもち、庭や池のある屋敷にくらしていた。庶民は、字も読むことができず、屋根もないきたない家にすんでいた。平安時代の貴族と庶民は、貧富の差がある。
今は、小学校に行って、字を教えてもらったりするけど平安時代は、子供の頃から働かされていた。私たちは普通なら、屋根をもった家に住んでいる。 でも平安時代の庶民は、屋根もない家。貴族のような暮らしとは大違いだった。

4組 M. A. 平安時代の貴族は、国司として農民の税を取り立てたりしていたが、その税は、自分達のいいようにされ、少し多く取ったりと、不正をしたものばかりで、くらのたかいものは、ひくいものを自由にあやつるようにしていると思いました。私達にも税 みたいなものはあるけれど、それは、きっちりと決められているものだから、平安時代に比べたらだいぶ楽だと思います。平安時代の貴族の生活は、すごく ゆうふくな生活だけど、そのうらでは、その自分勝手な行動に苦しんでいる人もいます。



尼崎市立小園中学校 第2学年

社会科通信

なんでやねん

発行責任者 倉橋 忠



No. 6 — 3 / 3

4組 M. Y. 彼ら貴族のくらしは、一見はでで、自由で、楽でとても楽しいと思えるけれど、その楽しみは農民の上になり立っていて、とても不安定なものです。農民のおかげで楽をしていることすらわすれて、私ふくをこやしたりしている貴族までいる。

全部ではないが、多かれ少なかれ農民の苦労をわかっていなかったりする。

だからこそ、ひとたび農民の中でききんが広がれば、その上の貴族まで危なくなっていく。 農民という危っかしいイスの上にふんぞりかえている貴族。ちょっとうかれていて、あっというまにイスはくずれて自分もけがをしかねない。 やはり、農民のこともよくかんがえてやらなければいけない。いつもしはいされる農民が気のどくだ。

貴族が虫で、農民は草の根だ。少しずつのびてくる葉を食べればいいのに もっと食べたくて、根まで食ってしまう。そうなると、もう終わり。食べ物もうなくなる。おごりたかぶると、ろくなことはないという見本のようなものかもしれない。

4組 M. O. 私は、貴族は好きだけど、仏教ばかり信じるというのは、あまりよくないと思う！ だって仏教を信じていると、肉や魚などが食べてはいけないので、だから仏教を信じるということは体に栄養が片よって、栄養しゅっちょうになるいうことなので、貴族だからといって、かっこつけて野菜とかしか食べないっていうのは、あまり体によくないので、貴族も農民と同じように、肉や魚などを食べて体に栄養をつけてから、紫式部のように文学にはげんでほしいと思います。

もし、私がこの時代に生まれていたら、きっとふつうの農民と同じように貴族であれあったなら死刑になってもかまわないから、好きな食べ物を食べると思います！ 貴族も農民と同じように仏教などを信じないで 好きな食べ物をたくさん食べてほしいと思います！

4組 S. S. 平安時代の遺族の人たちは、食料なども、自分でつくらず、農民のつくった米などを食べていたが、今、考えれば、私達も同じようなものではないのかと思った。私達も、食料は自分でつくっていないのに、農家の人がつくったものを平然と食べている。これが現在では あたりまえだと思うと今も昔もそうかわっていない気がする。

大人は食料じゃなくても別の所で働いているが、私は何もしていない。まさに平安時代の遺族と似ているところがあるような気がする。（貴族が遺族になっているのが残念 … 倉橋）

5組 T. K. 平安時代の貴族は農民にくらべればかなりいいものだったと思う。寝殿造のいい家に住み、きれいな服をきて、ゆうがに生活をしていた。いまのぼくたちのくらべれば、そんなにゆうふくでは無いのだろうけど昔はせいっぱいのぜいたくだったと思う。その中でいろいろな本がうまれた。その中のほとんどが貴族の女流文学者である。そしてかな文字を発見した。そういう意味ではかなり頭がよかったのではないと思う。

5組 C. A. 貴族のくらしは、華やかで、りっぱなやしきに住み、祭りや宴会の多いくらしで、華やかな生活にひたっていた。その一方で地方政治は国司にまかせっきりなり、地方政治は乱れていった。そして、農民はかいこんにはげみ、私有地を広げていった。やっぱり、生活が華やかすぎて、地方政治まで手がまわらなかったのは、「やっぱりなー」という感じもするけど、その反対に、文化の方は日本の生活や自然にあった日本風の文化が生まれ、『源氏物語』や『枕草子』などの名作ができたし、今、私達が使って

いるかな文字ができたのも、平安時代の女性達のおかげだと思った。

5組 E. I. 平安時代の貴族は、「現代の若者」と同じだと思う。「自分が良ければすべて良し。」まさにそのもの。人間だれでもそういう気持ちはもっている。だけど、自分の事しか考えていないってのは。

この時代、国司がズルして、農民から、たくさん税をとりあげている。たぶん、このために都まで米がいかなかったんだろう。（今の政治家と、どことなく似ているかな？） 農民がいっぱい死んでも、有力な貴族はたくさん生きている。やっぱり、おかしい。

農民は、米を作るから農民っていうんだと私は思っている。農民がガシで死ぬなんておかしすぎる。まさか米が一粒もとれないなんてことない。だって貴族が生きてるもん。ということは、貴族（国司）が税だといって、３％以上取っていったんだろう。これじゃ貴族はよくても農民はよくない。 きっと（たいはんの）貴族は、極楽へは行けなかっただろう。

5組 T. K. 貴族は寝殿造に住んでいて、いっぱいおしゃれとかして幸せに暮らしているかもしれないけど、そのぜいたくな生活ができるのは農民が一生けんめい働いてくれるからだと思う。

いくら農民が一生けんめい働いたとしても そのお金は年貢として、貴族にいつてしまうし、いくらがんばっても 農民は貴族のような生活はできないから 悲いそうだったと思った。

でも、きっと 貴族よりも農民の方が やさしいと思うし幸せと思う。だって 貴族は お金の事で頭いっぱいってかんじで かんじんな人間関係忘れてそうやもん。

5組 N. H. 貴族は荘園などから ばく大な収入をえて華やかなくらしをしていました。それにひきかえ農民は国司に年貢をとりたてられ大変苦しい思いをしていました。

どうして同じ人間なのに自分たちは楽な思いをして、農民たちは苦しい思いをしなければならないのか？

今の私たちのくらしにも税金はあります。けど、それは自分たちで使っているからいいと思うんです。けど農民たちは人のために一生けん命に働いていたんです。

貴族というのは身につけているものや生活などは大変ゆうふくで華やかであったけど 心の中はすごく貧しかったんじゃないかと思います。

5組 Y. F. 「源氏物語」を読んでもみると、とてもきらびやかな世界としてえがかれているけど。 本当は、どうだったんだろう。

貴族って本当にお金持ちなんだらうか。お金持ちの所は本当にすっごくお金持ちなんだらう。「寝殿造」の家に住んできらびやかな着物を着て、おでかけする時は、牛車に乗って。

でも、便所がないんでしょう。ちょっとそこの所が、「本当に貴族なの？」って思わせてしまう。荘園だっていっぱいあったと思う。でも働いているのは、その人達じゃない。

貴族の人達は「みす」の中に入って「ホホホホホ」と笑うだけ。「いっぺ働いてみろおー」って思うけど、貴族の人達にも、仕事はあるんだと思う。私は一回貴族になりたいと思う。だって食料には、こまらない。牛車に乗っておでかけ、きらびやかな着物、でも 便所がちょっといや！でも一回はなってみたい。 本当に、「タイムマシンに乗って、平安時代を見てきたい」って気分だね。

ここに紹介した人たちの意見の根拠にしたところは微妙に違います。それが、文を書いた人の個性による違いかもしれません。あるいは、学習して強く印象に残ったところが、学習する人によって異なったからかも知れません。いずれにしても、学習した結果が、その人の考え方の基礎を形成して、やがてその人の個性を形作っていくと思われます。

より豊かな個性を形成するために、確かな学力をつかみとってほしいと、すべての人に期待したいと思います。